第十一章　カムカムＡＴＭ

「カム・カム・エイティエム？　カム・カム・エブリバディの間違いじゃ？」

テレビには朝日を受けて眩しく輝く立派な銀行の建物が映っている。賑やかな音を立ててシャッターが上がり始める。奥の壁際にはずらっと現金自動預払機（ＡＴＭ）が並んでいる。画面を見ながら大家が山本に尋ねる。

「毎朝テレビドラマにしては変わった始まり方じゃな」

シャッターが上がりきらないうちにしびれを切らした預金者が潜り込むようにＡＴＭに向かう。通帳を挿入して間を置いてから開く紙幣投入口に紙幣を放り込む。ところが投入口が閉まってからしばらくするとどのＡＴＭのモニターもブルー一色に変わる。気分が悪いとブルーになるのは人間だけではなくＡＴＭも同じらしい。まったく反応しなくなる。

当然預金者が騒ぎ出す。ＡＴＭに取り付けられた受話器を取って耳に当てる。「ツーツー」という音が聞こえるだけで反応はない。時間は朝の七時過ぎ。銀行が開店するまで二時間。もちろん開店ギリギリにならないと銀行員が出勤しないと言うことはないが、少なくとも預金者たちは二時間近くなすすべがない。とにかくＡＴＭから離れるわけにはいかない。二番手グループの預金者はラッキーだった。その場から離れる自由が残されていたから。

「重大なエラーが発生したんだ」

山本の説明を待つまでもなく田中が解説する。この事態をどうやって予測したのか、どのようにして撮影しているのか分からないが、悲鳴に近いうなり声が流れる。

「通帳が戻ってこない！」

「取り消しできない！」

「問い合わせ電話が繋がらない」

とにかくＡＴＭの前にいる預金者は縄で縛られているわけではないがまったく動けない。ここにいる全員が同じ被害に遭っていることに気づくと会話が始まるが解決方法はない。やがて生理的な問題が起こる。しかし、絶対にこの場所から離れることはできない。

そのうち誰かが非常用の赤いボタンに気づく。押すと地味なサイレン音がするだけで反応はない。もちろん外で赤色灯が回転しているが中にいる預金者で気付く者はいない。四、五分すると警備会社の車とサイレンを鳴らしたパトカーがほぼ同時に到着する。

一番端の現金自動預払機の横にあるドアが開くと銀行員が出てくる。しかし、打つ手がないと状況を確認するだけで何ら説明することもなく先ほどのドアの中に消える。ある預金者がそのドアノブに手をかけるがすでにロックされていた。

呆然と立ちすくむ預金者たち。間違いなしに現金が預けられたのか確認が取れない。なぜなら通帳が戻ってこないからだ。ついに頭にきた預金者がＡＴＭを叩く。もちろんびくともしな

い。そのうち力を込めてどつき回す。それを見たほかの預金者も同じことを始める。中には蹴る者もいる。

「出てきた！」

通帳が吐き出されてきた。しかし、すぐに吸い込まれる。まさか出てくるとは思っていなかったから掴み損なう。順番待ちをしていた人たちも一緒になってＡＴＭを叩いたり蹴ったりする。

「わっ」

再び通帳が出てくる。今度はタイミングよくつかむ。しかし、ＡＴＭも負けてはいない。吸い込もうとする。指も一緒に！

「痛い！」

思わず手を離す。そのとき紙幣投入口が開く。すかさず手を入れる者がいる。しかし、お札はなく金属製の蓋がスライドして手を噛む。

「痛い！！」

咄嗟に鞄の端を突っ込んで挟まれた手を引く。投入口は鞄に阻まれて開いたままになる。

「ＡＴＭに噛まれた！」

＊

「よくも撮影したものじゃ」

「さすが山本さんのテレビ局だ」
「そうじゃろか。たまたま山本さんのテレビ局の記者が朝から預金をするためにこの銀行に行って現場に居合わせただけじゃろ」
ここで山本が現れる。
「私どものテレビ局には預けるお金などありません」
この一言で場がしらける。そして山本が画面から消えると映像がリプレイされる。そして「ＡＴＭに噛まれた！」で終わる。
『カム・カム・エブリバディ』じゃなくて『カム・カム・エイティエムじゃ」
「なるほど」